

## 2018年度 日本語教育実習 最終レポート

日本語教員養成課程も早くも終わりに差し掛かった今、これまでの三年間を振り返ってみると、「この過程を通して様々な事を経験し、学ぶことができた」という思いに至ります。以下にそれを、時系列で記します。

まず、私がこの日本語教員養成課程を選んだ理由について述べたいと思います。私は高校生の時から、少し日本語教員に興味を持ち始めたこともあり、「この職業についてもっと知りたい」と思ったことが一番最初のきっかけになりました。そして、一年生のときのオリエンテーションで日本語教員養成課程の説明を聞いた後で、「自分の成長にもつながるかもしれない」と思い、この過程を履修してみようと思いました。この頃は先生の話聞く限り「きつそうだな、最後まで頑張れるのだろうか」という不安な気持ちがありました。自分が教壇に立っている姿など全く想像が付きませんでした。また、「これを乗り越えたら、きっと今より成長しているに違いない」という期待も抱いていました。

次に、これまで履修してきた授業やその当時の自分自身について振り返ってみます。一年時は、「日本語学概論」「日本語教育方法論Ⅰ、Ⅱ」を履修しました。ここでは日本語を教える上で必要な知識や日本語の教え方について学びました。授業の中で、たくさんのベテランの先生方の授業をビデオで見ていくうちに、日本語と英語の授業の違いや授業の工夫の仕方を知ることができ、とても良い参考になりました。また、だんだんと日本語教師の授業スタイルが分かってきました。DVDであるベテランの先生の授業をじっくりと観察した体験から分かったことは、「日本語を教えるにあたって重要なのは、『日本語をただ単に教えればいい』という考え方ではなく、『学習者へのしっかりとした配慮が必要だ』ということでした。「日本語を教えることは決して簡単な事ではない」ということをここで感じました。この頃の自分自身を振り返ると、自分の気持ちをほとんど表に出さない性格でした。人前で話すこと、意見を言うことが苦手だったので、いつも相手の話を聞く側でした。これは自分の短所でもあり、克服したいと感じていたことの一つでした。

二年生時は、「異文化間コミュニケーションⅠ、Ⅱ」「日本語教育方法論演習Ⅰ」を履修しました。異文化間コミュニケーションⅠの授業内容は、日本語教育に関する知識と結びつく部分がたくさんあり、興味・関心をもって授業に参加することができました。日本語教育方法論演習Ⅰの授業では、一年生で得た知識を少しずつ活かしながら実践に取り入れていきました。絵カードの使い方、板書の仕方、表情などの細かなことを意識しながら、短時間の模擬授業を一人ずつ行いました。これが私たちの初めての模擬授業でした。教室ではなく研究室で、少人数で、とても短い時間ではありましたが、初めての経験だったのでとても緊張しました。短時間の実践だったのに、頭が真っ白になってしまい、全く上手くできなかったことをよく覚えています。「前に立って、色々な事を意識しながら授業をすることの難しさ」を知ることが出来ました。この時は、ただただ失敗したことに対する恥ずかしさしかありませんでした。

また、時間割の関係で、この学年で履修するはずだった「日本語教育方法論演習Ⅱ」を取ることができませんでした。「実習前の大事な授業を受けずに、三年生の実習で教えることができるのだろうか」という不安を覚え、正直この時に日本語教育課程の履修を継続しようかどうか本当に悩みました。しかし、「ここで諦めてしまったら、今まで学んで得た知識が無駄になってしまう、何事でも最後までやり抜くことが大切だ」と考え、少し不安な気持ちは大きくなりましたが、最後まで頑張ってみようと決心しました。この頃から私は、三年生の実習を、今までよりもさらに意識するようになり、日頃から自分の一番の課題であった「声の大きさ」や「話し方」を少しずつ気にするようになりました。実習がよいよ迫ってきていると考えると、正直怖かったです。

三年生になり、恐れていた実習本番を迎えました。前期ではウィンチェスターからの留学生への授業、そして後期はYMCAでの教壇実習でした。前期は慣れない教案や教材作りに多くの時間を費やしました。教案については「どういう流れで授業を進めればよいか」「時間配分はどのくらいが適切か」「いかに分かりやすい授業内容にするか」など細かい部分までとても悩みました。実際の授業を想像しながら流れを考えるのは、私にとって難しいことでした。授業の回数を重ねていくうちに、自分たちの教材や教案をより良いものに少しずつ変えていく必要がある、ということに気が付きました。最終的に学習者に達成してほしい目標を最初に設定することで、それに向けて何をすれば良いのかが見えてきました。また、私は授業のテーマを決めてから教壇に立つまで、実習生同士（ペア）で一つの授業づくりをしたことで、協力し合うことの大切さを知ることができました。「協力して一つのものを完成させる、作り上げることは決して簡単なことではない」ということを学びました。

教壇実習は、最初は「教える」という立場の責任感が私の中ではとても強く、前に立って上手く教えることができるのか、不安でいっぱいでした。授業の回数を重ね、毎回の反省を踏まえ、「自分自身の目標を持って授業をしよう」と決めました。私は「テンポよく、間をなくして授業を進めること」「声の大きさに気を付けること」「アイコンタクトをしっかりとること」の三つを自分の中の目標とし、頑張ろうと決めました。DVDで振り返ると、これらの目標がすべて完璧に達成できた訳ではありませんでしたが、少しずつ変わろうと意識している自分の姿を見ることができました。今学期は、授業の流れを自分で考えることも、教材作りも、何もかもが初めてのことだったので、たくさん考え悩んだことを思い出します。特に教案作りは、実際に自分で作って確認してもらうことをやっていなかったのも、とても難しかったです。YMCAでの実習は、見学に行ったときに、「前期のウィンチェスターの学生とレベルがかなり違う」ということを知って、責任感や緊張感、不安な気持ちがさらに増し、前日は眠れませんでした。何度も授業の流れを確認したり、教材の準備がしっかりとできているか見直したりと、頭の中はとても忙しく、落ち着くことができませんでした。前期と比べて、気持ちの変化が大きかった時期でした。

YMCAでの教壇実習を体験してみても感じたことは、「時間の経過があつという間だった」ということです。「一時間近くの授業をする」と最初に知った時は、「自分には無理だ」と不安でいっぱいでしたが、実際にやってみると、想像していた感じと全く違ったので、とても驚きました。実習が始まる前は、16人の生徒の前で授業をしている自分の姿がなかなか想像できない状態だったので、一回目の授業を終えた後の安心感はとても大きかったです。ここでもまた、「母国語である日本語を教えることは、決して簡単なことではない」ということを実感しました。

この三年間で自分自身が変わったと感じたことが四つあります。一つ目は「失敗したことに対する恥ずかしさが少しなくなった」ことです。失敗は怖いものだと思ってきましたが、そうではなく、失敗から学んで次に活かすという気持ちでいられるようになったかなと思いました。二つ目は「周囲の目があまり気にならなくなり、自分を表に出せるようになった」ことです。一年生の頃は自分に自信が持てず、殻に閉じこもっていることが多かったような気がします。しかし、それが少しずつ、前のような自分ではなくなってきたと感じています。この実習がそうせざるを得ない場をたくさん与えてくれたのではないかと私は思いました。三つ目は「人前で自分の意見を、正直に発言することができるようになった」ことです。今でもまだ、はっきりと自分の意見を言うことは、私にとって易しいことではないのですが、以前に比べると、積極的に発言することができるようになった気がします。最後に「声が大きくなった」ことです。私は昔からよく、声が小さいと言われてきました。実習を目の前にして、これが一番私が不安に感じていたことでした。また、自分の一番の課題でもありました。実習の最後の最後で、それをクリアできたことがとても嬉しかったです。これから先も色々な人とコミュニケーションを取っていく上で、声の大きさ、話し方には気を付けていきたいです。

実際にこの課程を履修してみて、正直きついと感じるものがほとんどでしたが、すべてを終えた後の達成感は、本当に忘れることのできないものになりました。始まる前は本当に不安と緊張でいっぱい、辛いこともたくさんありましたが、今こうして終えてみると、自分の自信や成長にもつながったので、諦めずに最後まで頑張ってきたと強く思います。

最後にこれからの抱負ですが、「社会人基礎力」という言葉が頭に思い浮かびます。社会人基礎力は、①前に踏み出す力（アクション）②考え抜く力（シンキング）③チームで働く力（チームワーク）という力で構成されています。私は「日本語教員養成課程を通して、これらの力を少しでも身に着けることが出来た」と感じています。特に、三年生の実習は大きかったと思います。これから就職活動を行っていく中で、色々な企業に出会い、自分に合った仕事を見つけるためには、まず「前に踏み出す力」が必要になってくると思います。どこかで失敗したからといって、いつまでも落ち込まず、前を向いて次へ次へ進んでいけるように頑張りたいです。そして私は、この経験を必ず就職活動の面接でアピールしたいと考えています。学生のうちで誰でも体験できることではない、貴重な体験だと感じているからです。また、この過程を履修したことによって、今まで知らなかった「日本語の面白さ」や「日本

語を教えることのやりがい、楽しさ、難しさ」を知ることができました。私は現時点では一般企業に就職するつもりですが、この三年間の努力や得た知識、色々なものを無駄にしたいと思うので、将来また日本語を教える立場として、日本語を学ぶ外国人をサポートできるような機会に出会えたら嬉しいです。また、それを目標の一つにしていきたいと考えています。